

第3表 明治43年旧四村の職業別戸数

職業	中川副		大詫間		南川副		西川副	
	戸数	比率	戸数	比率	戸数	比率	戸数	比率
農業	785	73.2	215	72.6	620	55.1	476	52.2
工業	71	6.6	16	5.4	61	5.4	53	5.8
商業	184	17.0	30	10.2	255	22.6	191	20.9
官吏	5	0.5	—	—	3	0.3	7	0.8
教員	10	0.9	—	—	4	0.4	—	—
医師	6	0.6	—	—	7	0.6	3	0.4
僧侶	—	—	—	—	—	—	15	1.6
産婆	2	0.2	—	—	—	—	—	—
鍼灸	3	0.3	—	—	—	—	—	—
公吏	7	0.7	—	—	5	0.4	10	1.1
漁業	—	0	29	9.8	128	11.4	157	17.2
雑業	—	—	6	2.0	43	3.8	—	—
計	1,073	100.0	296	100.0	1,126	100.0	912	100.0

明治43年各村「沿革誌」より作成

もつとも半農・半漁、半商・半農といった兼業的な形も多かったと思われるが、ここではいずれかに割り切つて記載している。その他の職業で記載がないのは、もちろん該当なしのところもあったであろうが、雑業にふくまれていた可能性もあるから、例えば西川副を除いては僧侶はいなかったとすることはできない。

以上職業別の戸数から見た旧四村の性格である。旧藩以来物資の集散地であつた諸富・早津江両港の影響もあつて、零細規模であるが比較的商品流通が盛んであつたことがわかる。

二 大正、昭和前期川副の商・工業

(一) 早津江商業の衰退

前節では幕末、明治期の川副における商・工業の展開とその変貌を述べた。大正期にはいると再びその様相は一変する。それは国民経済的にいえば産業資本が成立し、国内市場が形成されて産業構造そのものが大きく変貌したことである。それを川副に投影していくと、米穀や海産物・干鰯、それに雑貨を中心とした海運による交易が衰退し、かつての早津江がその面影を没していく過程である。第一は肥料事情であろう。干鰯・粕はかつては金肥の主座を占めていた。明治農業は自給肥料を主体としながらも、魚肥の施用量を飛躍的に増加させ生産力を高めていった。しかし日清戦役以来は中国から大量の大豆粕が輸入されて魚肥を圧倒していくし、加えて化学肥料を生産されはじめた。干鰯を中心に殷賑をきわめた早津江の役割は急速に縮小されてしまうのである。また一方米穀の集荷業務も、国策として産業組合に吸収され、信用・販売・購買の主要業務も農会など系統組織に吸収、統合されてしまう。

当時の事情を「産業組合ノ拡大強化及生産団体ノ共同販売等ニ因リ、相当ノ打撃ヲ蒙リ経営困難ニ陥リ居レルコトハ争フベカラザル事実ナリ」として、県下の商業関係の不振を述べている。また肥料商の現況について同じ

資料は「肥料売買業者ノ如キハ昭和五年末ニハ五百十戸ナリシモ昭和九年末ニ於テハ三百五十戸ニ減ジ、尚ホソノ半数以上ハ殆ンド休止状態ニアリ。而モ肥料ノ需要ハ年々増加セシニ拘ハラズ肥料商ノ取扱数量ハ年々減少シテ数年前ニ比シ三割以上ヲ減セリ」となげく状態であった。さらに米穀商についても同様で次のように述べている。

「又米穀商ノ如キモ各消費地、卸問屋經由又ハ直接軍部、大工場、消費組合へ相当莫大ナル数量ヲ供給シツツアリタルモ、産業組合、農会等ノ直接取引拡大ノ為漸次圧迫セラレテ業務不振ヲ来シ休廃業ヲ為スモノ亦続出セントスル状態ニアリ」であった。

以上は昭和十年代の県下全般の状態であるが、これまで述べてきたように早津江の主力商業は主穀の集荷販売と肥料(干鰯主体)であったから、その影響はきわめて甚大であった。

このように早津江商人の活動が、著しく制限され縮小されるのである。そしてこれら不振の要因として、さらには海運業そのものの役割低下もあげなければならない。干満差が大きく運航に不便な有明海沿岸の海運が、船舶の大型化、機械化によって著しく困難になったことがあげられる。加えて今一つ長崎本線・唐津線・佐賀線の開通によって、輸送業務が急速に鉄道輸送にとって代わったことがある。こうした輸送手段と変革と産業的な進歩発展が、早津江の役割を著しく圧迫し衰退させたのである。大正期は以上のような主穀の集散、そして肥料・海産物仲買業の衰退、いいかえると早津江の衰退がはじまった時期である。

(二) 酒造及び海産加工業の勃興

そしてこれに代わって登場し、あるいは装いを新たに主力産業として成長していくものがあつた。いずれも食品加工業であるが、一つは海産物加工業であり一つは酒造業であつた。

ところで川副は有明海をのぞむ海産資源にめぐまれた地帯である。豊富な海産物とその加工業が大正七、八年ごろを契機としてにわかに伸展してきた。南川副の江頭亀市(明治三十二年生)、竹下伊作(明治三十七年生)、川原常次(明治三十八年生)らがその先駆者であつた。いずれも有明海でとれる魚、貝類の仲買・小売業をやりながら、これら海産物を原料とした加工業に踏み切っている。当初は「がん漬」「あみ漬」「海茸」「わらすば」の類であつたが、やがて「粕漬」「漬物類」に製品が多様化していった。もちろん当初はリヤカーや自転車による行商からはじまり、やがて特約小売店に卸すようになった。販路も平坦一円から県内一円。やがては鉄道輸送による県外出荷もはじまり、主要デパートとの特約もはじまつた。しかしそこに至るには、前記先駆者らの血と汗の努力があつたのである。そして製造工程も当初の鍋・釜の段階から家内手工業に、そしてやがてボイラーや動力機械を駆使した工場の生産へと発展していった。それと同時にいずれも「江頭商店」「竹下商店」「川原食品」へと合名あるいは合資会社組織に発展していくのである。なお昭和七年に竹下商店から竹下八郎(大正四年生)が分離独立し「竹八商店」が設立された。

これら海産物を主体とした食品加工業者はいずれも有明海特産のイメージを前面に出し、佐賀県の名を全国に

昭和二十年の敗戦は、わが国の全ての産業を崩滅させた。工業も破壊されたし、したがって商品流通も途絶えた。わずかながら統制ルートを通じて細々と食料と日用品が配給されたにすぎない。もとより必要を満たす量で

(一) 敗戦と復興過程の商業

三 戦後川副の商・工業

なかでも「窓の月」の福岡日出磨は昭和十三年中国に進出し、「窓の月蘇州工場」を設立して当時前例のない中国での清酒製造を成功させた。一般に清酒は「不況に強く好況にはさらに強い」といわれる。そして今一つ「戦争にも強い」といえる。度重なる戦乱、戦争を契機にしてむしろその業績を向上させていく不思議な力を備えている。軍需の関係であろう。しかしこの戦争に強い酒造も、敗戦色が濃厚となりあらゆる分野で資材の供給力が衰退していった敗戦直前の数年間は、わずかに細々と工場の火をともし程度にすぎなかった。敗戦は事態をそこまで追い込んだのであった。

いに栄えた。大正期の資料に欠けるが、昭和にはいつてからのこれら三酒造業者の製造高は第4表のごとくであった。販路は広く九州一円、とくに海路で熊本・鹿児島への販売も行われた。「御宴」「窓の月」「栄城」の名は西日本一帯に広くとどろいたのである。

第4表 昭和期川副町酒造の実績

営業主 年 代	吉武一郎 (南川副)		福岡浜子 (西川副)		弥富元 (中川副)	
	御 宴		窓 の 月		栄 城	
	持越高	製造高	持越高	製造高	持越高	製造高
昭和4年	石 789,486	石 636,199	石 258,020	石 382,432	石 358,149	石 344,420
6年	641,890	636,038	314,430	315,218	451,810	200,316
9年	893,324	1,065,904	356,605	703,308	307,126	393,387
12年	—	1,090,036	—	721,164	—	403,037
13年	—	1,088,432	—	730,964	—	404,933
14年	723,000	583,000	373,000	385,000	299,000	241,000

- (1) 佐賀税務署調べ「佐賀県酒造史」より作成
- (2) 持越高は10月1日現在、製造高は当酒造年度



岸川の三軒を加え計四軒となったが、その後岸川が不況の影響を受けて廃業し、川副では酒造業は三軒となった。酒造業は当時としてはかなりの資本力を必要とし、しかも強い専売制下にあったから戸数はわずかであったが、川副の主力産業といつてよかつた。近隣全てこれ豊富で良質な米の主産地であり、これらを原料とした酒造業は大

高からしめたのであった。今一つは酒造業である。江戸時代に弥富一軒であった酒造業も、明治中期には吉武・福岡・